弘前れんが倉庫通信

弘前れんが倉庫美術館を
もっと知るフリーペーパー

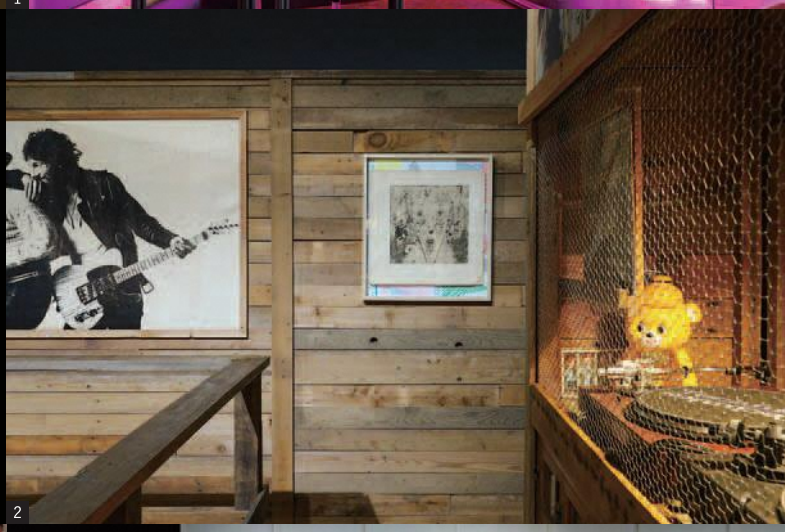
Hirosaki MOCA Letter

vol.13

TAKE FREE


1

弘前れんが倉庫美術館は、2025年、開館5周年の節目を迎えました。
2025年4月4日から11月16日まで、開館5周年を記念する展覧会として「ニュー・ユートピア――わたしたちがつくる新しい生態系」を開催しました。また、12月5日から2026年5月17日まで、「杉戸洋展：えりとへり / flyleaf and liner」に加えて、新たにコレクション展をスタートしました。さらに、ワークショップや音楽ライブ、上映会などのプログラムを実施しました。


2



3


4

活動レポート：2025年度をふり返る
＋
コレクションを知る

佐藤朋子《ひろさき縦覧場》身体を通じて語り直す・場をひらく
宮本ふみ


5



6

1.「ニュー・ユートピア」展より、渡辺志桜里《サン・ルーム［不在の部屋］》（2017年～継続中）　撮影：木奥恵三
2.「コレクション展 2025-2026」より、奈良美智《無題》1983-1986年頃　杉戸洋氏蔵　撮影：成田写真事務所　©Yoshitomo Nara
3.総来館者数 30万人達成セレモニー（2025年7月16日）
4.「杉戸洋展」展示風景　撮影：成田写真事務所　©Hiroshi Sugito, Kazunari Hattori, Gokula Stoffel
5.「5周年！ れんがひろばのアートフェス」美術館前のれんがひろばに並ぶ「キニナル屋台」（2025年7月11日～13日）　撮影：成田写真事務所
6.プレイフルワークショップ「コミュかん～展覧会をみて・話して・共有する～」　講師：太田歩（演劇ユニット 一揆の星）（2025年8月3日）

H-MOCA Report 2025-2026

2025年度に開催した企画展、新たにスタートしたコレクション展、ラーニングプログラムなど1年間の活動を紹介します。

活動レポート | 2025年度をふり返る

展覧会　開館5周年記念展　5th Anniversary Exhibition

ニュー・ユートピア――わたしたちがつくる新しい生態系

Plastic Utopia : Our New Ecosystem

1期：2025.4.4-7.7　2期：2025.7.11-11.16

開館以来収集してきた当館のコレクション（収蔵作品）に加えて、未来をうらなう若いアーティストたちの作品と、1万5千年をさかのぼるともいわれる津軽地方の人間の営みに連なる作品を織り交ぜながら、わたしたちがつくりだす新しい生態系について考えようとした展覧会です。本展のための新作のほか、こぎん刺しや縄文土器などの地域ゆかりの資料も展示しました。また、開館から5年間の美術館の活動を振り返る資料も紹介しました。



出品作家：
川内理香子、小林エリカ、ユーイチロー・E・タムラ、渡辺志桜里、SIDE CORE、工藤麻紀子、奈良美智、佐藤朋子、さとうりさ、ナウィン・ラワンチャイクン、ジャン＝ミシェル・オトニエル、藤井光、大巻伸嗣、斎藤麗、永野雅子、細川葉子、畠山直哉、和田礼治郎、蜷川実花、松山智一







アーティスト・リレートーク
出演：川内理香子、渡辺志桜里、佐藤朋子
聞き手：佐々木蓉子、木村絵理子、宮本ふみ
（2025年4月5日）

左：甕（かめ）形土器（田舎館（いなかだて）式）　田舎館村教育委員会蔵
右：蓋（ふた）形土器（田舎館式）、壺（つぼ）形土器（田舎館式）　田舎館村教育委員会蔵
中央：大巻伸嗣《Abyss - Jomon》2023年　弘前れんが倉庫美術館蔵
撮影：木奥惠三

展覧会　開館5周年記念展　5th Anniversary Exhibition

杉戸洋展：えりとへり / flyleaf and liner

SUGITO Hiroshi : flyleaf and liner

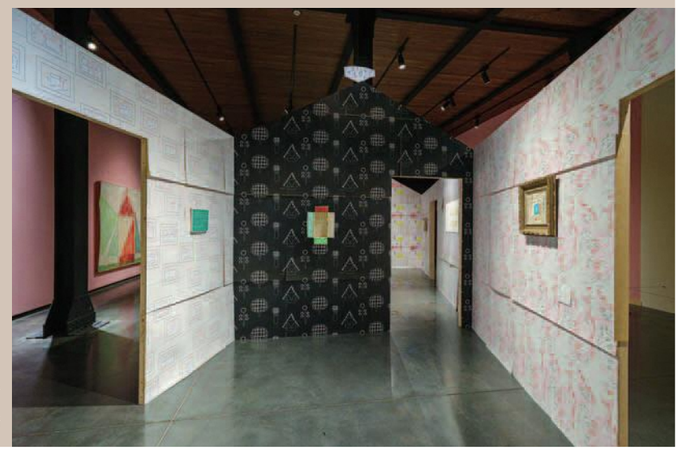
2025.12.5-2026.5.17



オープニングトーク
出演：杉戸洋、服部一成、ゴクラ・シュトフェル
聞き手：木村絵理子
（2025年12月6日）

現代の日本を代表する画家の一人である杉戸洋の個展。本展ではカンヴァスを囲む「えり」や「へり」などの「余白」に着目し、1990年代から最新の作品まで87点を紹介。コラボレーターに、当館のロゴなどを担当したグラフィックデザイナーの服部一成を迎え、杉戸の作品に触発されて生まれた壁紙と、杉戸作品との組み合わせによる共作も展示しました。

コラボレーター：服部一成
友情出品：ゴクラ・シュトフェル



杉戸洋、服部一成《えりとへりの小屋》2025年
©Hiroshi Sugito, Kazunari Hattori
撮影：成田写真事務所

コレクションを知る

当館では、現代のアーティストたちが、弘前や津軽地方の文化や風土に触発されて生み出した個性豊かな作品を収蔵しています。2025年より現代アート講座「H-MOCAレクチャー」をスタートし、学芸スタッフそれぞれの専門的な視点からコレクションを美術史や社会とのつながりの中で多角的に読み解く試みを行っています。「コレクションを知る」では、「H-MOCAレクチャー」の内容を紹介します。

佐藤朋子《ひろさき縦覧場》　身体を通じて語り直す・場をひらく

宮本 ふみ　弘前れんが倉庫美術館 ラーニング・キュレーター

佐藤朋子は、日本の近代化の道のりの中で歴史からこぼれ落ちた出来事や、各地に残る言い伝えや遺跡などに関心を寄せ、フィクションとドキュメンタリーが入り混じった作家自身の「語り」を通じて、複数の時間軸が交差する場を作り上げる。《ひろさき縦覧場》は、当館2階の展示室を出た左側にある窓辺で鑑賞するための作品で、佐藤の語りによる音声、モニターに映される写真、水色のベンチから構成される。鑑賞者は窓辺に置かれた水色のベンチに腰掛け、モニターに映る画像と窓の外の風景を眺めながら、スピーカーから流れる佐藤の語りに耳を傾ける。

私たちは今、山のなか、山のうえ、
ひろさき縦覧場にいます。
（…）
青空高く　そびえ立ち　からだに雪の
着物着て

語りの中には、弘前のシンボルともいえる岩木山、安寿（あんじゅ）、世界自然遺産に登録されている白神山地など、津軽地方にまつわるモチーフが登場し、反復する言葉の合間には、唱歌「ふじの山」（巌谷小波（いわやさざなみ）作詞、1911年発表）が挿入される。そして、モニターや窓外の風景へと視線を促す指示が語りの随所に差し挟まれ、鑑賞者の視界は、展示空間から街、さらにその背後に広がる山の連なりへと拡張していく。

本作は、弘前エクスチェンジ#06「白神覗見考（しらかみのぞきみこう）」[1]での、弘前および白神山地を起点とするリサーチ型のプロジェクトを経て制作された。本作に登場する安寿は、津軽地方に伝わる口頭伝承「お岩木様一代記」[2]の主人公（姫）である。この物語は中世（12世紀後半～16世紀末）に説教節として全国的に広まった「安寿と厨子王（ずしおう）」伝説をもとにしながら、津軽独自の物語として展開してきたとされている。安寿は、幼い頃に父に土に埋められ、視力を失い、人買いに連れ去られて酷い目に遭わされながらも、父や母を思い続け、最後には岩木山に転生したとされる。津軽では、安寿は悲劇の主人公であるだけでなく、岩木山の神として祀られて、人々を見守る山の神として現在も語り継がれている。またこの物語は、東北地方のイタコ[3]が祭文として語り継いだもので、一人称形式で語られる点に特徴がある。口寄せを行うイタコは、自身を安寿に重ね合わせるように、安寿の生涯を自らの物語として語り直す。佐藤は、こうしたイタコと安寿の重なりに関心を寄せ、弘前市内の安寿ゆかりの史跡や伝説が残る土地を巡った。

さらに、本作に何度も登場する唱歌「ふじの山」は、岩木山が「津軽富士」と呼ばれることにちなむ。この唱歌は、明治末期に文部省が初めて編集した尋常小学校の国定教科書「尋常小学読本唱歌」で登場する。急速な近代化が進む中で、国定教科書を通じて全国の子供たちに日本のシンボルとも言える富士山の雄大さを教えることで、愛国心や「日本」という国家の概念を形成する重要なツールとして機能した。山は自分たちが住む土地の象徴であり、その山を仰ぎ見る視線の共有は、共同体意識や国民意識の形成と重なりうる。しかし、本作の終盤では歌詞がハミングへと変化することで、歌や山がもつ意味は固定されず、鑑賞者へと開かれる。ここには、一つのイメージへと収束することから距離を取り、解釈の余白を残そうとする佐藤の意図が読み取れる。

このように、佐藤は「語り」が主となるレクチャーパフォーマンス形式の作品に取り組んでいる。パフォーマンスは絵画や彫刻のような物として残る作品だけを芸術とする考え方を揺さぶり、作家の身体、行為、時間、観客との関係そのものを作品の要素として扱う表現だ。芸術とは何か、作品とは何かという既存の枠組みを問い直す性質をもつため、確立した定義はなく、内容も多岐にわたる。

レクチャーパフォーマンスは、1960年代以降のパフォーマンス・アートやコンセプチュアル・アートの流れの中で、作家の思考やリサーチのプロセスを実演として提示する形式として発展してきた。たとえば、ヨーゼフ・ボイスは、観客との対話を通じて社会に働きかける実践としてレクチャーをパフォーマンスとして位置づけた。また、ロバート・モリスが既存の講義音声を当て振りしたパフォーマンス《21.3》（1964年）は、権威的なレクチャーのあり方を問い直す批評的身振りであると言われる。これらの事例が示すように、レクチャーパフォーマンスは単なる情報伝達の手段としてではなく、「語る」という行為（形式）そのものの制度的前提を問い返し、「語ること」自体を芸術的媒体として扱う実践であると捉えることができる。



弘前エクスチェンジ#06「白神覗見考」
白神山地訪問の様子

佐藤にとってレクチャーパフォーマンスは、語りを通じて他者とともに考える場をひらく方法である。佐藤は各地を訪れ、史跡を巡り、伝承を聞き、本や博物的な資料に触れながら、そこで見聞きして得たものから作品を作り上げる。佐藤にとって制作は「学びのプロセス」であり、そこで語られる内容は完全な物語ではなく、断片として提示される。点として提示された情報が鑑賞者の思考や想像のなかで結びつくことで、作品は立ち上がる。佐藤のレクチャーパフォーマンスは、鑑賞者の思考を喚起する装置であり、佐藤の身体を介した語りによって、個人と歴史、土地と記憶をあらためて接続し直す試みである。そこで手渡されるのは、佐藤自身のリサーチや経験を通して編み直された語りであり、それは観客一人ひとりの想像と結びつくことで、新たな意味を生成し続ける。

[1]当館で2024年度に実施したリサーチ型プログラム。佐藤は「向こう側研究会」を立ち上げ、台湾や韓国に滞在しながら、青森県と秋田県の県境にある白神山地について、有志参加者とともに白神山地に対する印象や、自分にとって「向こう側」にあると思うものについてオンラインで意見を交わした。

[2]「お岩木様一代記」は岩木山に祀られた安寿の由縁を説いた縁起物語のひとつ。本物語の中で語られる安寿と厨子王の伝説は、のちに森鴎外の小説『山椒大夫』のもとにもなったとされている。安寿姫と厨子王が「岩城判官正氏（いわきのはんがんまさうじ）」の子とされ、「岩城（いわき）」の名が岩木山と結び付けられることで、物語が津軽へ取り込まれていったと考えられている。

[3]主に青森県や秋田県、岩手県北部などで、死者の霊を自身の体に憑依させ、その言葉を伝える「口寄せ」を行う盲目（もしくは弱視）の巫女。宮城県ではオガミン、山形県ではミコやオナカマなどと呼ばれる。

展覧会

コレクション展 2025-2026

Collection 2025-2026

2025.12.5-2026.5.17

開館5周年を機に、新たにコレクション展をスタートしました。煉瓦造りの建物や美術館を取り巻く地域に触発されたコミッション・ワークをはじめとする、国内外のアーティストによる作品を、2階の展示室で紹介します。第一回のコレクション展では、2025年度の新収蔵作品を中心に、2つのセクション「未完の豊かさ：奈良美智と杉戸洋」「北へ向かって」で構成しました。

出品作家：
雨宮庸介、大巻伸嗣、工藤麻紀子、斎藤麗、佐藤朋子、シャギャーン（奈良美智＋杉戸洋）、ジャン＝ミシェル・オトニエル、ナウィン・ラワンチャイクン、奈良美智、蜷川実花、潘逸舟（はんいしゅ）、吉田真也、和田礼治郎（五十音順）





上 雨宮庸介《H&T. A,S&H. B&W.（ヒール＆トゥー、アップル、ストーン＆ヒューマン、ブラック＆ホワイト）》（部分）
2022年　弘前れんが倉庫美術館蔵
下 吉田真也《春へ》2021年　弘前れんが倉庫美術館蔵（牧寛之氏寄贈）
撮影：成田写真事務所

ラーニング

展覧会と連動して、さまざまなラーニングプログラムを実施しました。

ワークショップ

杉戸洋によるワークショップ「紙で服をつくろう」では、展覧会タイトル「えりとへり / flyleaf and liner」にちなんで「えり（襟）をつくる」活動に挑戦。杉戸さんから制作の中で考えていることや制作の過程で生まれる素材についての話を聞いた後、色々な素材を使って自分らしい襟を作り上げました。参加者がそれぞれの視点を発見し、新たな交流が生まれました。



杉戸洋によるワークショップ「紙で服をつくろう」
（2026年2月28日）

H-MOCAライブ

当館では、多様な価値観や新しい視点に出会う場として、映画上映や音楽ライブなどを展開する「H-MOCAライブ」を開催しています。
2026年3月には、映画『BAUS 映画から船出した映画館』（2024年製作）の上映会と、本作の監督である甫木元（ほきもと）空と出演の井手健介によるライブ「幽体離脱ツアー」を同日に開催。上映会と音楽ライブという2つのプログラムを通じて、映画の世界観と生の音楽が立体的に交錯する、新しい試みとなりました。



LIVE 井手健介＆甫木元空 幽体離脱ツアー in 弘前
出演：甫木元空、井手健介、会場：SPACE DENEGA
（2026年3月15日）

弘前れんが倉庫美術館
［開館時間］9：00〜17：00（12月〜2月は9：30開館）
［休館日］火曜日（祝日の場合は翌日に振替）、年末年始
〒036-8188 青森県弘前市吉野町2-1　［TEL］0172-32-8950　［Mail］info@hirosaki-moca.jp

［デザイン］デザイン工房エスパス　［印刷］凸版メディア株式会社
［編集・発行］弘前れんが倉庫美術館（指定管理者 運営業務担当　エヌ・アンド・エー株式会社）
［発行日］2026年9月30日

弘前れんが倉庫美術館 公式ウェブサイト
弘前れんが倉庫美術館 公式SNS

弘前れんが倉庫美術館
HIROSAKI MUSEUM OF CONTEMPORARY ART